

図書館だより

2024春

No. 270

調布市立図書館

水木しげる氏

表紙絵

＝みんなで行くぞ！＝

表紙絵：水木しげる

- | | |
|--------------------------|-----|
| ・ 特集：読書推進事業 | 2～5 |
| ・ 令和5年度 子どもの本に親しむ会 | 6 |
| ・ 利用者懇談会 | 7 |
| ・ 郷土の歴史と伝承 | 8 |

※音声版、マルチメディアDAISY版もあります。ご希望の方は図書館へお問合せください。

特集 読書推進事業



図書館は本を貸し出すだけでなく、利用される皆さんの生涯学習を支援する取り組みをおこなっています。

今回は調布市立図書館の読書推進事業についてご紹介します。

1 読書会の運営や支援

1.1 読書会に参加してみませんか

～図書館主催の読書会編～

この本を読んで、ほかの人はどのような感想を持っているのだろう、どのような気持ちになるのだろう等と考えたことはありませんか。十人十色ですので、感想に何が正しいとか、正しくないということはありません。

令和5年度におこなった読書会では、進行役が作家や本について書かれた背景などを説明し、参加者から読後感、他の人に聞いてみたい事などが語られ、お互いに意見交換が活発にされていました。

石川淳の『焼け跡のイエス』(1946年)を取り上げた時には、作品の舞台となっている、闇市のある生活を体験された方から、そのころの自分が感じた気持ちなども語られ、参加された方の間で70年以上前のことがリアリティを持って共有できていました。

毎夏平和祈念事業として、公開読書会『緑陰読書会』『納涼読書会』も開催しています。

最近取り上げた作品	著者	読書会開催日	書誌番号
白い病	カレル・チャペック	令和5年8月3日	002770802
あそこはフリードリヒがいた	ハンス・ペーター・リヒター	令和5年8月24日	000666623
動物会議	エーリヒ・ケストナー	令和4年8月4日	000030422
二十四の瞳	壺井 栄	令和4年8月25日	001509249

読書会とは

1冊の本を読んで読後感や意見を学びあいます。

終戦直後、上野ガード下の闇市で、主人公私が、鼻をつくような悪臭を放ち、頭部をデキモノでおわれた浮浪児が、一瞬、キリストの姿に変わるのを見る『焼け跡のイエス』(新潮文庫紹介文から)

※書誌番号とは館内 OPAC「ぴゅー太」から出力した資料詳細票などのバーコード上に印字されている番号です。調布市立図書館で所蔵している資料を特定することができます。

※上記書誌番号の資料の他にも、貸出しできる資料があります。

読書会参加者の声

- ・読書会がなければこの作品は読まなかった。
- ・以前読んだことがあるが、何十年もたってから再読した。違う発見があった。

1.2 読書会に参加してみませんか～サークルの読書会編～

調布市立図書館は1966（昭和41）年に開館したころから読書会をつくり、その活動をサポートしてきています。当時は読書会や学習サークルなどが集まってできた、調布ブッククラブ（現アカデミー愛とぴあ）を中心に、市内各所で活動する読書会がありました。現在は、調布市文化会館たづくりを会場に活動するグループが多くなっていますが、図書館の集会室、公民館、地域福祉センターなどを会場にしているグループもあります。

読書会の運営ルールはグループによって違いますが、現在は、月1回定例日を決めて、2時間ほど、取り上げた本について、感想などを語り合います。人数は10人前後です。読書を通じて、社会や生活を考えることもあります。

『^{しんぶ}針布読書会-五十周年記念文集-』（2015）には、図書館が活動を始める前から続いていた、読書会の様子が書かれています。読書会の先輩の経験から運営のヒントも得られるかもしれません。※調布市内のすべての図書館で所蔵しています。

1.3 図書館が行う読書会サポート



1.3.1 読書会で取り上げる本の貸出・相談

『私たちの読書会が薦めるこの百冊-調布市立図書館四〇周年記念-』

（2006）には、長く読書会を続けてきた皆さんが選んだ、読み継がれた本が紹介されています。図書館では、本以外でも、読書会を始めるにあたって、何を取り上げるかなど相談をお受けし、貸出をしています。

1.3.2 会場の確保

読書会をおこなうには会場が必要です。一定の条件はありますが、調布市文化会館たづくりや図書館分館の集会室などを読書会用に確保しています。

読書会体験

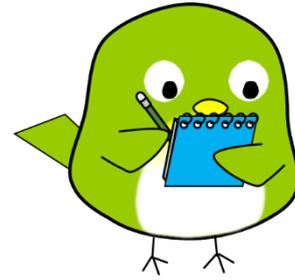
読書会を体験してみたい、やってみたいという方は、『公開読書会』や『初めての方向のための読書会』などに参加してみませんか。

市報や図書館ホームページ等で、日程や会場をお知らせしています。

2 講演会の運営

今話題となっている事柄や、多くの人々が関心をもっている共通の課題などをテーマにした講演会を開催しています。

令和5年度実施 講演会	講師	開催日
文芸講演会 『本が本を呼ぶということ』	作家、早稲田大学文学学術院教授 堀江 敏幸 氏	6月11日(日)
歴史講演会 『ロシア的なものとは何か』	名古屋外国語大学学長 亀山 郁夫 氏	8月12日(土)
文化講演会 『日本とフランスのはざままで ——仏文学者の立場から』	フランス文学者、翻訳家、エッセイスト、放送大学教養学部教授、 東京大学名誉教授 野崎 敏 氏	11月6日(月)



※樟まつり文化講演会「旅のたのしさ」池内紀氏

2011年2月4日(土)

『調布樟まつりー共に生き、共に学ぶー』^{くすのき}とは

生涯学習の基本を培う目的と、更なる学習の広がりを願い、図書館とアカデミー愛とぴあが共催して、毎年2月に開催しています。講演会のほか、俳句大会、短歌大会、淡彩画展をおこなっています。(旧図書館まつり)

3 学習サークル・創作サークル支援

読書会を続けていると深く学習してみたいとか、表現したいという気持ちが出てきます。

図書館はアカデミー愛とぴあと連携し、市民の読書推進事業をおこなっています。

『アカデミー愛とぴあ』(旧調布ブッククラブ)とは

昭和48年に発足した生涯学習団体です。昭和42年から地域に誕生した読書会や俳句・短歌・小説などの創作サークル、一つのテーマを深く学習する研究会など約28サークルから出発しました。現在は、34サークル(令和5年度現在)が文化会館たづくりや図書館分館を拠点に活動しています。

令和6年度には、公開講座として「森鷗外・与謝野晶子・永井荷風 平和を愛する恋の文学者たち」(講師:持田叙子氏)、「宗教から世界の現状を見る」(講師:瓜生中氏)、「今、なぜドストエフスキーか?」(講師:亀山郁夫氏)、「松井須磨子の『復活』とトルストイの『復活』」(講師:木村敦夫氏)が予定されています。

お問い合わせは 中央図書館読書推進室 042-441-6328

(調布市文化会館たづくり10階 午前9時から午後4時まで) へどうぞ。

令和5年度 子どもの本に親しむ会
今こそ子どもたちと楽しみたい 伝承の文化
わらべうたと昔話

講師：服部雅子氏

令和5年11月2日（木）に、長きにわたり子どもたちにわらべうたや昔話を届ける活動している服部雅子さんをお招きし、わらべうたや昔話の魅力についてお話しいただきました。講演の一部をご紹介します。

●伝承されてきた子育て文化

わらべうたや昔話は、耳から耳へ語り継がれてきたものです。長い間伝承される中で淘汰され、良いものが今に残っています。

そもそもおはなしとは、自分で聞いて、読んで面白いと感じ、それを誰かに伝えたいと思ってするものです。子どもたちはおはなしそのものと同時に語ってくれた人の心を受け取って、自分の心も作り上げていきます。



●昔話について

昔話は庶民の暮らしの中で生まれ、子どもたちへ語り伝えられてきたものです。昔話に登場する悪者は、子どもたちが漠然と感じる不安や恐れに形を与えた姿です。主人公に感情移入して、困難を乗り越える疑似体験をすることは、現実の世界で困難にぶつかった時に我慢したり立ち向かったりするための力になります。

昔話絵本はたくさん出版されていますが、ダイジェストになっているおはなしでは昔話の良さが伝わりません。私たち大人は、できるだけ良い再話の本物の昔話を選びたいですね。



●わらべうたについて

わらべうたは、もともと子どもたちの遊びの中で生まれたものです。短い歌の中には、シンプルな言葉やリズム、繰り返し、長音・撥音・促音の組み合わせなど、子どもの心をくすぐる面白さが詰まっています。ぜひ、子どもたちと向かい合って、その子の名前を呼びながら一緒に楽しみましょう。

昔から子どもたちに親しまれてきた昔話とわらべうた。大人が自分たちの声で言葉に体温を与え、次世代につなげていきたいと感じる会となりました。



【服部 雅子（はっとり まさこ）氏】

西東京市で、はとさん文庫（家庭文庫）を主宰しているほか、西東京市もぐらの会（素話）代表や西東京市教育委員に就任。

また、小澤昔ばなし大学再話者協会会員やちひろ美術館東京わらべうたの会講師として活動されています。



利用者懇談会報告



令和5年11月16日(木)と11月30日(木)に、調布市立図書館利用者懇談会を開催しました。第1回目は文化会館たづくり、第2回目は佐須分館おはなし室を会場に、各回とも『図書館で「読める」をサポートします!』をテーマに2部構成で実施しました。

第1部は、図書館で所蔵しているマルチメディア DAISY (音声と一緒に文字や画像が表示されるデジタル図書) の実演を交えながら、図書館を利用することや本を読むことが困難な利用者へ向けたサービスについて、子ども向けのサービスを中心に資料を用いて説明しました。第2部は、参加者の図書館活用方法や図書館へのご要望・ご質問などを含めた意見交換を行いました。

第1回目の意見交換では、利用支援サービスの利用方法や、所蔵資料についての質問がありました。「図書館は静かにしなければならない場所で敷居が高いと感じる利用者が多いと思う」「利用支援サービスや宅配サービスは視覚障害や聴覚障害のある方だけが利用するものというイメージを持つがそうではない。そのことが広く知らればよい」といった利用者目線のご意見もいただきました。

第2回目の意見交換では、「若い世代での図書館の利用頻度は」「図書館の利用促進のために、人気キャラクターとのコラボイベントの実施や、民間施設での図書館スペースの提供などの提案」「図書館における予算執行や業務内容について」「東京都内での調布市立図書館の所蔵状況」などのご意見やご質問を参加者からいただきました。

令和5年11月16日(木)に開催された利用支援サービス利用者懇談会では、利用者6人(ご家族の代理参加・利用者の同伴者を含む)、音訳者4人、点訳者4人(布の絵本製作者1人含む)、布の絵本製作者1人(点訳者兼任)にご参加いただきました。図書館から令和4年度の利用状況報告を行った後、利用者から日頃の感想や要望を伺いました。終始和やかな雰囲気、「第1回からはほぼ欠かさず出席している」「毎日録音図書を聞いており、生活の支えになっている」といったお言葉や、「学校でポスター掲示するなど、保護者向けにマルチメディア DAISY をPRできればよいと思う」といったご意見をいただきました。今回、株式会社エクシオテック福祉グループから音声案内デモ機を借り、6階エレベーターホールと601会議室の前に設置しました。今後も、誰もが利用しやすい形式で本の内容にアクセスできるよう情報収集に努め、サービスの維持向上に取り組んでまいります。

各回とも活発に意見を出していただき、皆様の声を直接伺うことができた貴重な会になりました。詳しい内容は、図書館のホームページで公開しています。利用者懇談会でいただきました様々なご意見などを活かし、より良い図書館になるよう目指してまいります。

▼第1回目 中央図書館



▼第2回目 佐須分館



▼利用支援サービス



植物と地名が語る調布の伝承文化

関口 宜明 のぶあき

1. 伝統行事に使われるカツノキ

古くから植物と人間は深いつながりがあり、身近な草木にも、その性質から人間の営みのなかですでに失われた、または失われつつある習慣、信仰などを引き出す材料となるものがあります。その一つに調布で「カツンボ」とよばれるカツノキ（和名ヌルデ）があげられます。この植物は、『万葉集東歌』（70末～80半ば）にもうたわれており、縁起がよく魔除けの力があるとされてきました。この木は落葉木で、生長がはやく生命力があるので、中国で古くから邪気を祓うと信じられた桃に似た力があるといわれています。また乾いた木を燃すとパチパチと勢よく音をたてるので、厄除け祈願の護摩焚きにも使われてきました。

2. 豊作祈願に使われたカツンボ

調布では、1月15日の小正月に「アワボ、ヒエボ（粟穂、稗穂）」とか、「アボヘボ」というものを木肌の軟らかいカツンボで作りました。これは大正半ばまで食べられた粟、稗のその年の豊作を神に願うものです。



アワボヒエボと護摩札

人間地区では、この木の皮を削った方を粟、そのままの方を稗と見立て、竹の枝にさして肥料置き場に立てたり、神棚に供えたりします。この行事は水田の少なかった多摩地方で広く行われ、とりわけ焼畑で雑穀が作られていた多摩川上流の山間部でさかんでした。

3. 焼畑をしめす地名

奥多摩町、青梅市およびその周辺には、かつて焼畑が行われたことをしめす「指（サス）」という言葉がつく地名が合わせて26カ所ほどあります。そしてその場所では、ほとんど小正月前後に「アボヘボ」の行事が行われました。

焼畑は、山腹の木々を秋に伐り払えば翌年の

春、春に伐ればその年の夏に焼き、その灰を肥料にして稗、粟、豆などの種を播くものです。奥多摩に隣接する秩父地方では、江戸時代に雑穀などを作る焼畑にするため、前年の秋に山の木々を伐ることを「差」とよんだという記録があります。この「差」「指」は、翌年の焼畑区域を指定することを意味したといわれます。

4. 魔除けに使われたカツンボ

調布にも「佐須」という地名があります。ここでは7月20日に「カドブセ」といって、カツンボで作った護摩札を村境に貼り、疫病などが村に入らないように祈願しました。

旧金子地区（西つつじが丘あたり）でも村の魔除け祈願として「フセギ正月」という行事が昭和20年代はじめまで行われました。これは2月8日に常楽院下の「ハケ」（台地縁の急斜面）に生えているカツンボで御札を作り、家々の門口に1年間打ち付けておいたものです。

しかし戦後はしだいに宅地が増えてカツンボの木が減ったので、地区の境の木に取り付けるようになりました。近年ますます土地の開発が進み、こうした植物が自生する余地はせばめられています。そこで自然環境をまもり、年中行事や土地に刻まれた地名をしらべることは、調布の地域文化を後世に伝える手だてとなるでしょう。

※参考文献：『日本人と植物』前川文夫

『焼畑民俗文化論』野本寛一

刊行物番号

2023-234

図書館だより 第270号

令和6年3月25日発行 [市内印刷]

発行 調布市立図書館

〒182-0026 東京都調布市小島町2-33-1

TEL 042-441-6181

<https://www.lib.city.chofu.tokyo.jp/>